

海洋文化としてのマオリ伝説とコミュニケーション

—— 日本神話のアマ語りごととマウイの大魚物語の意味作用 ——

市 川 昌*

はじめに一なぜ異文化研究としての マオリ神話・伝承なのか—

日本とニュージーランドは、ともに環太平洋に位置する島国であり、赤道から北半球、南半球に对峙している。季節が逆であるのを除けば春夏秋冬の四季を有する温帯に属し、ともに豊かな海洋資源に恵まれた火山列島である。筆者の所属する江戸川大学のニュージーランド海外研修は、15周年を迎える。マス・コミュニケーション学科と応用社会学科（現人間社会学科）は、平成2年開学のときから1年目は希望者のみ、その後は必修科目として、ほぼ入学者全員が毎年9月に3週間ニュージーランド、オーストラリアの7大学で英語と異文化学習を重ねてきた。異文化学習で必要なのは、歴史と伝承を伝える博物館教育である。ニュージーランドの博物館協会所属169館のうち24%にあたる40館は、常設展示のマオリ文化コーナーを持っている。江戸川大学の学生も博物館見学を通じて、英国系移住民の欧米文化とともに、特色ある先住民マオリ族の神話・伝承に触れ異文化理解を深めてきた。

大学時代から「夕鶴」の鶴女房再話で知られる劇作家木下順二、「家郷の訓」「忘れられた日本人」などで知られる民俗学者宮本常一、児童文学者松

谷みよ子らの「民話の会」の末席に参加していた筆者にとって、環太平洋の文化・伝承の交流はアイデンティティを再考する研究対象となった。この海外交流のなかで強く意識せざるを得ないのが、環太平洋文化としてのニュージーランドと日本の古代神話や伝承を含む不思議なご縁である。単に太平洋の赤道を挟んで対峙する島国国家というだけでなく、先住民であるマオリ族の海洋文化と日本列島の黒潮文化との類似点と相違点など、環太平洋文化の親近感を意識せざるを得ない。オセアニア地域は日本人学生にとって渡航以前には英語を母国語とする南半球の美しい治安の良い観光地であるという認識しかない。

加えて長い間の英語コンプレックスと結びついて、たてまえとしての民族平等ということは意識していても、いわれなき人種的差別感を身体的に根強く植えつけられていて、マオリ文化については南太平洋の原始民族という誤った認識を持つ学生も多い。マルチカルチャリズムとして民族の多様性を社会学の知識として教えても、実感として理解できない。ホームステイ・ファミリーが、先住民であるマオリ系であったり、アジア系であると、自分がアジア系の一員であるという誇りを忘れ衝撃を受ける。この隘路を抜けるにはアジアのなかの日本文化と、太平洋を挟んで海洋性文化に多くの共通点をもち、多様な文化的重層性を持つポリネシア文化との関連性など民族意識としてのアイデンティティ（National Identity）の基盤を考えさせる必要がある。この論考は教育的必要性から始めたマオリ文化研究が、次第に異文化交流の構造と、象徴作用と文化伝播によるコミュ

2004年11月29日受付

* 江戸川大学 社会学部マス・コミュニケーション学科教授
映像情報論, 社会教育学, コミュニケーションと文化, 映像情報論

キーワード：環太平洋文化, 異文化交流, ポリネシア文化,
日本神話, コミュニケーション・モデル

ニケーション・モデルの再考へと展開した記録である。

1. 日本文化の起源と、環太平洋文化としてのマオリ文化

形質人類学的には片やマオリ族はハワイ諸島やサモア諸島に属するポリネシア系民族であり、東南アジアを経て中国、韓国に隣接する東アジア系民族である日本人とは歴史的にも相違点が多く、双方の類似点を求めることは意味のないことのように思われる。しかし最近の言語文化研究ではマオリ語が帰属する西部ポリネシア語の起源は太平洋の潮流に従い南下したマレー語系が起源であり、さらに台湾、南中国に起源を求める学説が有力である。ニュージーランドの博物館展示でも、この潮流伝播の道は博物館来訪者に東南アジアから南太平洋への海上ルートによる文化伝播として紹介され、文化人類学、言語学研究者など関係者が関心を持ってきた主題のひとつとなっている。日本でも日本語という特殊言語の起源を、これまでのウラルアルタイ系言語という内陸シルクロードからの伝播経路と共に海洋文化を含む多様な融合仮説が学会で問われてきた。特にこれまでの北方内陸文化の流れとともに、海洋文化の北上に従い中国南部から沖縄・奄美諸島を経て九州さらに本州へと南方起源説との融合過程を分析する学説が強いことは知られている。古代史研究では松村武雄、増田義郎は、日本神話の原像が北方系狩猟遊牧文化類型とともに、南方系漁労農耕文化類型の神話系列が共存していたことを指摘している⁽¹⁾。岡正雄は縄文の狩猟原始農耕文化、弥生初期の稲作父系文化、弥生後期の漁労水稻文化に分類し、縄文弥生の農耕技術移転には海洋文化の影響を強く意識している⁽²⁾。人類学者石森秀三は、太平洋地域の島嶼部に多い海洋性民族としてのマオリ語を含むオーストロネシア語族の言語と、ニューギニア高地など山岳民に多い非オーストロネシア言語族の起源をさぐり、「海の民」と「山の民」の文化融合過程における民族移動の系譜を検討し、オーストロネシア語族系の海洋民族が、紀元前 3000

年以降に南中国の海岸部からフィリピン、ミクロネシア、ポリネシアに分布したとしている。さらに石森は、ハワイ、イースター島、ニュージーランドのポリネシア文化三頂点への岐路として、マーケサス諸島の重要性を指摘している⁽³⁾。南方系漁労農耕文化の拡散はマオリ族のポリネシア文化の神話と日本神話の原像との類似点と相違点を、比較的に考察することの歴史的意義を否定することはできないことを示している。

マオリ族は 10 世紀頃に赤道周辺のポリネシア諸島であるサモア島、クック諸島などから大型カヌーで集団移住してきた海洋性民族である。マオリ族は南島と北島を「AOTEAROA」（長く白い雲のたなびく地）と名づけた。1642 年にオランダの航海者アベル・タスマンが上陸し、ニュージーランド（新しいオランダ）と名づけたが、原住民と対立し 4 人の船乗りを殺され退散した。しかしおよそ百年後の 1769 年イギリスのジェームス・クックの率いていた英国海軍が移住に成功し、その後欧米系移民が捕鯨基地、あざらしなど海獣の毛皮とり、カウリなどの森林資源を求めて次々に移住地を拡大し、マオリ系先住民は次第に追いつめられていく。白人の土地資源収奪が続くなかでマオリ族の首長たちと英国統治長官ホジソンが結んだ英国国民として平等の扱いを保証した和平交渉がワイタング条約（The Treaty of Waitangi）である。ワイタング条約は次第に名目化して英国系移住者の政治経済的支配が続き、現在純粋なマオリ系住民は 40 万人弱で全人口の 10% 以下といわれるまで減少と混血が進んでいる。

このニュージーランド国民の 1 割に満たない先住民が、現在独特の海洋文化の神話と伝承で、英国系移住者の欧米系文化（Pakeha）に対抗する強烈なイメージを残しているのは、マオリ族が持つ言語コミュニケーションへのこだわりとアイデンティティ（Identity）の強固さにある。ニュージーランド政府は、1980 年代以降宗主国である大英帝国イギリスが欧州連合（EU）加盟をめぐるヨーロッパ中心主義に傾き、地理的に遠いオセアニアまで政治的、経済的に支援できない中で英国離れを進め、日本を含む東南アジア諸国の

ASEAN 連合に加盟してアジア寄り多民族国家として独自政策を進めている。

1985 年ワイタング条約の精神である英国民としてマオリ族が平等に法的保護を受けているかを調査するワイタング審判所が設置され、1987 年にはマオリ語が英語と併用される公用語として認可された。現在マオリ語による初等、中等教育機関、マオリ語専用放送局も全国に設置されている。経済的には日本とニュージーランドの関係は、日本は羊毛、農産物、鉱産物輸入を進め、ニュージーランドは日本から自動車、工業製品を輸入し、極めて良好な相互輸出入バランスをとっている。日本からの観光客も、アメリカに次いで多い。このような良好な国際関係のなかで古代の海洋文化を起源とする現在のマオリ・コミュニケーション政策の精神的な底流は何なのかを見極めることは、日本およびアジア諸国とニュージーランドの相互理解を進め、環太平洋文化を深めるための必要条件のひとつとなってきた⁽⁴⁾。

宮本常一が、生前に大阪教育大学から武蔵野美術大学、神奈川大学などに膨大な民俗資料をかかえて移れる頃、お会いする度に故郷山口県大島が海人（アマ）の流れである。漂泊は生き様であり、常一の父がオセアニアのフィジーへ出稼ぎに行き風土病のため生命からがら帰国したこと、父の弟はフィリピンのダバオに移住したこと、日本人の常民にとって出稼ぎに国境はなく、現代よりも異文化は身近であったことを自分史として語られたのを鮮明に覚えている。「君、九州の五島列島の若い漁民は、戦前には漁船で週末に上海に映画を見に行き、異国の女と遊んでいたんだよ」常人にとって海は狭いと強調された。同じく若き日に放送取材で同行した気象学者荒川秀俊は、今昔物語、六国史などの文献研究から漂流民、漂着民と、太平洋の気象潮流の関係の深さを指摘した⁽⁵⁾。さらに博物館教育において文化人類学者祖父江孝夫からは、古代から日本人の庶民のコミュニケーション活動は、想像以上にグローバルなことに注目すべきだと教えられた⁽⁶⁾。石森秀三は、ポリネシア民族が長期の航海を可能にした技術として、ダブル・カヌーとしての荒波の波動に強く、

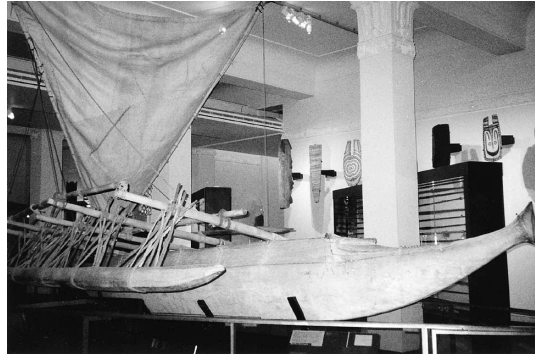


写真1 ポリネシア系民族の海洋性カヌー（双胴船構造）
（クライストチャーチ市立博物館）

2 隻のカヌーを連携して船体の間に板をはり着け居住空間とした双胴船の構造をあげている。さらに保存食としてのヤムイモ、パンノキ、バナナなどの乾燥貯蔵、海上釣り技法、星座、海流、風向きなどの天文知識をあげ、長期間航海は可能としている。マオリ文化についてかつての職場放送教育開発センター長であった社会学者加藤秀俊から、日本の雅楽とインドネシア音楽舞踊の相関とともに、マオリ文化の影響について強い情熱を吐露され多くの示唆を得た。社会学のコミュニケーション研究としての文化伝播の主題として日本神話とマオリ神話をとりあげたのは上述の所以による。

2. 海洋文化としての古代日本人とマオリ族の神話の意味作用

古代日本民族の歴史的研究において、日本列島固有の単一民族論が根強い時代から、現在は内陸型北方民族移住説と、南方系水稻漁労民族移住説が時代的に差異はあっても日本列島に共存していたという複合文化説が有力になっている。そして形質人類学でも南方系の古いモンゴロイドである縄文人と、その後大陸から寒冷気候にも適応した北方モンゴロイドの弥生人が渡来し、縄文人文化と弥生人文化が接触混合したと指摘している⁽⁷⁾。

1970 年に沖縄県具志頭村の港川採石場から古代の人骨が多数発掘された。この人骨は放射性炭素法年代測定、動物骨化石などの科学分析から縄文時代の約一万八千年前から一万二千年前日本列

島の南方に住んでいた縄文人の祖先とされ、港川人と命名された。身長は150 cm くらいの壮年男性で、胴長、目はひっこみ、鼻梁は高く、やや険しい顔立ち、脛の骨は頑丈であるといわれる。この頭骨は眉間の部分が強く隆起し、頑丈な下顎骨を持ち、典型的な縄文人の特性を示している。さらにアジアの新人化石である中国の山頂洞人とインドネシアのワジャック人とこの港川人を比較すると、きわめて海洋民族であるインドネシアのワジャック人と大変類似していると報告されている⁽⁸⁾。このことは縄文人の頭骨、骨格が環太平洋の海洋民族インドネシア系人類に似ているということから、縄文人の南方起源説を強化する考古学的事例として注目したい。

言語学的にマオリ語は、西マレー・ポリネシアン・マダガスカル語属（Western Malayo Polynesian and Madagascal）を起源とするオーストロネシア語（Austronesian）として BC 3000 から AD 600 くらいまでに太平洋諸島に広がった。現在のサモア、マルケス、トンガ諸島、インドネシア諸島、マレーシア、ボルネオ、さらに台湾のみならず、その一部はアフリカに近いマダガスカル島にも拡大している。まさに環太平洋の海洋潮流の流れに沿った文化伝播であることに注目したい。このオーストロネシア語の流れについては、ニュージーランドのマッセイ大学の日本語学および考古学研究者である角林文雄主任講師の長年の業績である「古代学研究」の論文でご指導いただき、ウエリントン教育大学のケリ・カー（Keri Kaa）およびロバートソン（P. Robertson）主任講師、オークランド教育大学のムートン（D. Mooten）主任講師からは異文化の指導、マオリ

語とコミュニケーションについて多くの示唆を受けた。改めて感謝の意を表したい。

マオリ語は音節が日本語、マレー語、インドネシア語のように子音と母音の組み合わせで構成され、母音終わりが明確な発音をするので日本人にわかりやすい。ローマ字表記をそのまま発音すれば良い。母音はアエイオウ（A, E, I, O, U）の5母音である。日本語はアイウエオ（A, I, U, E, O）で共通している。子音は10個（H, K, M, N, NG, P, R, T, W, WH）である。NGは鼻濁音、WHはF音に近い。ニュージーランド人の挨拶であるキアオラ「KIAORA」（Good Day, こんにちは）、マラエ「MARAE」（Church, 教会）、ハカ「HAKA」（War Cry, 雄たけび）はラグビーの試合前のコールとして知られている。ただポリネシア語の文法、人称は複雑で日本語との共通点は少ない。強いていえば日本語の短音節の繰り返しであるポンポン、トントンなどはマオリ語でも強調するときに表現され、日本人としては親しみやすい。マオリ語は抽象的な概念を示す単語が他のポリネシア語より多いのが特徴である。たとえばホークスベイにある「テ マタ」は高い山という意味であるが、マタは「顔のような形」「鋭利な刃物」という意味もあり故事来歴などが意味に加味されて複合的な表現を作っている。「TEIKAROA MAUI」は、「マウイの長い魚」ということになる。また刺青は権威の象徴として、酋長など権力者は刺青に凝っていた。最近は少ないが高齢者が刺青を顔のまわりに化粧のように彫り驚かされることがある。これは日本の古代の耶馬台国を記録した魏志倭人伝にヤマトでは潜水漁労をして黥面文身（刺青）をしていたという記述と黒歯



図1 オーストロネシア語からマオリ語にいたる言語系統図

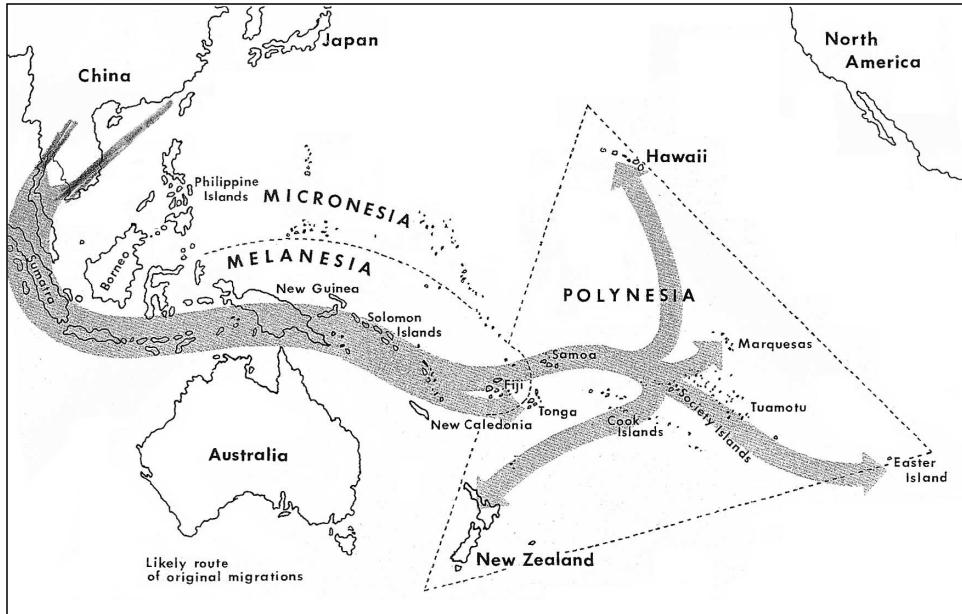


図2 ニュージーランド博物館におけるマオリ系ポリネシア語の系統図

出典：Tongata Whenua (2003) Forestry Corporation, NZ

国と合わせ興味深い。

原オセアニア語であるオーストロネシア語からマオリ語にいたる言語系統図（図1）をみると、中国南部、台湾からマレー、インドネシア、太平洋諸島、ニュージーランドとなる。

ニュージーランドのオークランド市立博物館、ウェリントン市のテ・パパ国立博物館のマオリ言語起源マレー・ポリネシア語系統地図（図2）においては、その起源を台湾、中国南部に求め、台湾の近隣である沖縄諸島との関連については未だ触れていない。しかし黒潮などの暖流の海流図では、沖縄諸島と台湾とは同一線上に位置するので、沖縄諸島や黒潮文化まで台湾マレー言語起源説を遡らせるのは、不自然とはいえない。ただ筆者は人類学研究者ではなく言語学および考古学的検証には深入りせず、論考を専門である文化コミュニケーションの変容転移説の立場から、両民族の神話伝承の比較検討による海洋民族としての類似性と相違点について、マオリ伝承と日本神話の記号論的な意味作用研究に留めたい。

マオリ語の起源については、環太平洋のポリネシア諸島であるサモア島、クック諸島、ハワイ諸

島から、インドネシア、マレーシア、タイ、中国南部、台湾に到る潮流に従った道が推定されている。ニュージーランドの政府刊行のマオリ文化紹介、博物館展示なども上述の図式を用い、定説的に認められている系統図としている。

コミュニケーションと社会化の関係については、20世紀はじめ社会学者C.H. クーリー（Cooley）は、「コミュニケーションとは、これによって社会が発展するメカニズムを意味する。これは精神のすべてのシンボルであると同時に、空間を通じて発展し、時間を通じて伝達する過程である」という古典的な定義を行った。コミュニケーション論では、情報の社会化の過程である「移動」「伝達」「交換」を重視して、情報は人から人へと、ある地点からある地点まで空間、時間を超えて、移動し、伝達され、交換されていくことを観察し調査し、分析することが要請される⁽⁹⁾。コミュニケーション研究として神話、伝承を情報の移動、伝播、交換の過程としてとりあげるには、情報としての神話、伝承の内在している記号的意味の解釈が重要になってくる。アムステルダム大学教授でマクロな視点からのコミュニケーション・モ

デル研究の第一人者である D. マックウエール (Denis McQuail) が、スウェーデンのベクシャー大学コミュニケーション学講師 S. ウェンダール (Sven Wendahl) と共著で出した “Communication Model for the Study of the Mass Communication, 1981” のなかで、「コミュニケーション研究は、最近発展している身体的および対人コミュニケーション研究 (Personal Communication Research) の成果および組織内コミュニケーションの構造、流れに関する研究の成果から多くの示唆と影響を受け、この相互作用によって新しいモデル構築が可能になる」としている⁽¹⁰⁾。このことは情報の流れの分析において、情報の送り手と受け手の構造と情報内容の質的分析は不可分であることを示している。情報の送り手と受け手の相互作用については、これも古典的構造となりつつあるが、オズグッド (C. E. Osgood) とシュラム (W. Shramm) の循環モデル (Osgood and Shramm Circular Model, 1954 (図 3)) が古典的ではあるが、現在も社会集団相互のコミュニケーション過程の分析に有効である。

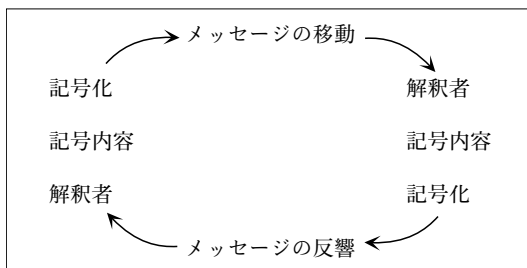


図 3 Osgood and Shramm Circular Model

海洋民族における諸民族の航海による相互交流において、重要な伝播・交換は、言語、神話、伝承、生活様式としてのカヌー、漁労、農耕などの道具類である。前章で記述した原オセアニア語というべき中部、東部、マレー・ポリネシア語属の流れをみると、台湾、中国南部、マレーシア、インドネシア、サモア、クックそしてマオリへと発展系統化している。さらに遠くインド洋を越えてマダガスカルにまでポリネシア系文化が拡大しているのは、潮流に沿って航海が行われ、送り手

および受け手としての海洋諸民族間にメッセージとしての情報内容である言語、神話、伝承の共有が意識されていたと考えるのがコミュニケーション論としては自然である。マオリ神話では記号化および解釈者とは、情報内容としてのメッセージをいち早く知り、他者集団に伝達し、影響をあたえうる人格神であり、当然航海者であるカヌー船団をひきいる大酋長または族長、指導者である。神話および伝承では神、兄神、弟神、あるいは民衆リーダーとして共通の名前、たとえばマオリ神話の共通主人公はマウイ (MAUI) として表現されている。マウイは、天上界や地上界を支配するカミではなく、人間たちの社会集団が生活文化を形成する過程の集積のなかから、象徴化が行われ、その象徴過程のなかから自然に生まれてきた英雄像のひとりである。この英雄像は象徴化されて集団の意識的統合の手段として利用され、相手の社会集団との衝突、葛藤が続く中で、集団の伝承の集合としての民話は、民族意識を高めるための統合手段となり専門集団内で体系化され、物語として成熟してくる。つまり民話としての民衆の知恵や伝承は、社会集団の統合手段として神話体系となっていく過程と考えられる。つまり神話と伝承は基本的に同じ構造であり、生活文化の未成熟な形態が伝承である。伝承は社会成員によって共有される中で、歴史的な時間の経過とともに、社会集団相互の葛藤練磨のなかで揉まれ、生き残った階層構成原理が機能する成熟形態が神話体系と考えている。

社会学の始祖のひとりであるデュルケムは社会集団の行動原理として、集合的良心 (Collective Consciousness) の存在を基底におき、行動規範としての良心を支えるものとしての神話体系を意識していた。このような社会集団の行動原理として支配服属関係に、基底文化としての神話交換ないし相手の神話の意識的取り入れが、政治的イデオロギーを固める要因として有効であったことは理解される。ピエール・ギロー (Pierre Guiraud, *La Sémiologie*, 1971) は、「記号学—意味作用とコミュニケーション」のなかで、「言語学者たちが、言葉の 2 重機能と呼んでいるもの、すなわち

客観化され、合理化された知的理解が可能なものについての記号と、表現性、主観的情動、願望の記号というふたつの型に対応するものである。われわれの経験のもつこれらふたつの面を切り離すことこそ、近代西欧的な文化特性である。反対に古代的な論理以前の文化においては、行為のプログラム（狩猟、戦争、農業）が儀式化しており、芸術と技術が融合しているから（理解の記号と願望の記号という）ふたつの面も融合する傾向をもつ」としている。このことは非合理的で呪術的、芸術的な伝承・神話は古代においては制度的社会を維持している。伝承・神話は権威にとって合法的でしかも支配統治をシステムの的に実施する道具として機能していく言語体系であったと理解される⁽¹¹⁾。ここでマオリ族の伝承および神話について、環太平洋文化として日本神話の神話との比較考察をする前に、コミュニケーションとしての記号化、解釈（記号の受容としての取り入れと理解）、記号化（反応と応答）の権力構造による過程を图示しておきたい（図4）。

日常生活のなかでの伝承の集積と一般化→神話の発生としての象徴的英雄像→神話の語り部としての専門集団化→集団相互の葛藤・支配構造の誕生→他の集団との衝突対抗→相手の神話の自己集団への取り入れ・朝貢→支配・隷属構造の図式化と明示→神話・伝承ネットワークとしての集団間コミュニケーション網の拡大

図4 伝承・神話のコミュニケーション過程と民族の相互作用

上述のような伝承・神話のコミュニケーション過程では、送り手としての神話の記号化の主体、また受け手としての解釈者の主体が重要な役割を果たしている。そこでメッセージとしての情報の移動と反響についてマオリ神話伝承と日本神話のなかで、特に類似点の多い「水」と「火」、「男」と「女」、「山」と「海」などをキーワードとして、神話構造のなかで対比的な位置付けである Positive and Negative、陽陰の差異から生まれる情報の流れと民族のアイデンティティの関係について検討してみたい。海洋民族としてのマオリ神話

では、海、川、森、樹木、風、太陽、大地には固有名詞の神が存在し、人格をもつ人間はマウイという共通名のほか男性神はランガ、女性神はパパとして表現される。日本神話でも国生みのイザナキ、イザナミ伝承は海人（アマ）族の信仰が色濃く反映し、海、川、森、火、風、大地の名前などは人格神が身体を洗うミソギや、結婚の儀式、狩猟農耕の暮らしの context から生まれている。この分析にあたっては、古事記、日本書紀をもとに、風土記および南方系神話との関連で琉球神話、奄美・沖永良部神話の伝承記述についても対象としたい。

これまでの通説では、海人（アマ）族とは縄文後期から弥生時代にかけて、大陸の南中国にあたる呉や越の人たちやその沿岸の海洋民であり、九州地方を中心に渡来してきた人たち、さらに南洋諸島からの漁業を専業とする海洋民であるとされてきた。そして先住民族である縄文・弥生民に漁労、航海術、土器製造、製塩法、水田耕作法を伝播させたとされる。ポリネシア系海洋民をアマ（海人）族とすると、水田耕作とはポリネシア民族は無縁であり、イモ文化である。アマ族は漁労、航海術に長けた弥生以前の渡来民か、弥生以降奈良・平安それ以後にも多くの南洋系渡来民を南蛮・異形の漂流民とする記録があるので、このような海洋民全体を指していると考えたい。筆者の山小屋のある長野県安曇野の穂高神社由緒書には、安曇族は北九州に起こり海運に携わった氏族で豊穡の地を求めて日本海を北上し、安曇野に定住し穂高神社を海神の祭祀としたと記述している。穂高神社は「主神穂高見命は、別名字津志日金折命（ウツクシヒカナサクノミコト）と称し、海神の御子で神武天皇の叔父神である。延喜の制では式内名神大社に列され、昭和21年神社本庁の別表神社として特別に遇されている」としている。神武東征の神話と海人族の神話との相互関連でも注目される⁽¹²⁾。北アルプスの山麓に御船を飾るお船会館、御船祭りが現在まで続いていることは興味深い。

またNHK 京都局勤務の頃考古学者森浩一に同行して古墳時代の海の道を取材をして、太平洋岸、

瀬戸内だけでなく、日本海側の出雲、能登、丹後に考古学的関心を向けることを学んだ。丹後の由良川流域は埋蔵文化財が多く、丹後の浦島伝説が広く流布していることに注目した。村上政一(2003)は、景初4年記銘銅鏡出土に関連して、天照(アマテラス)玉神社、宮津市天の橋立の丹後一ノ宮、福知山の浦島神社、大江山の鬼伝説など海人族関連について若狭湾と由良川の海上河川交通を指摘し海人族の広がり指摘している⁽¹³⁾。さらに海人族の遺跡については、古事記、日本書紀に関わりのある瀬戸内海の淡路沼島の沼島古墳(竪穴式古墳)に、鹿角製のヤジリ、土鍾、石棒、須恵器、土師器のほか弥生後期とみられる製塩のための土器が出土しているのも興味深い。

3. 天地開闢の国生み神話にみる日本の アマ語り神話とマオリ神話

日本民族の天地開闢神話を古事記伝の記述に従って記述してみたい。なお神の御名は音韻のみカナ表記で示し、後述するポリネシア神話の神々の音韻と比較照合したい。

「天地始めて発れし時に、高天原に渡りし神の名は、アメノミナカヌシノカミ。次にタカミムスヒノカミ。次にカムムスヒノカミ。この三柱の神は、ともに独り神となり座して身を隠しき。次に国稚く浮けるあぶらのごとくして、くらげなす漂える時に、葦牙(あしかび)のごとく萌え騰がれる物によりて、成りし神の名は、ウマシアシカビヒコジノカミ。次にアメノトコタチノカミ。(中略)この神たちは天地より先立ちて、成り座しつれば、ただ虚空中成り座しけむを(後略)」この古事記の記述で注目すべきは、天地が定まる前は、宇宙は虚空であり、無限の何も無い混沌であったことである。もうひとつは国が定まらず虚空のなかにあぶらのように浮かぶ水母のようなもやもやした透明な曖昧な物体が漂っていたということである。この後国生み神話としての高天原の人格神としてのイザナキ、イザナミの婚姻伝承の記述と続いていく。「アメノ」で始まる神は、天または水にかかわる広大な空間に漂う不思議な存在が意

識されていた。「ムスヒ」は、「結ぶ」であるという解釈もあるが、なんらかの言語学的な連なりを示していると考えられる⁽¹⁴⁾。

東シナ海と太平洋の潮流に沿って、アジア大陸の首飾りのように連なる南西の島々が、琉球弧である。この中心をなすのが沖縄諸島であるが、沖縄の琉球神話においては、秘儀的な巫女、ノロによる聖性の口述伝承が主体である。琉球の降り神の神話では創造神としてのカミが天から降臨して、国生みをしたという伝承形態をとり、記紀の記述と同種のものが多い。伊是名島採取の伝承では、混沌とした原始暗闇のなかに降臨した神がアハラ御嶽(ウタキ)から世界に光りをあたえ、この世界を明るくしたが、クマヤ洞窟にひとり入り再び暗黒の世界に戻った。七人の神がクマヤ洞窟から創造神を連れ戻すように祈り、世界の明るさが戻ったと記述している。古事記、日本書紀のアマテラス神話にある弟ササノオノミコトの乱暴に耐えかねて姉アマテラスが洞窟に隠れたというストーリーと共通したところがある。また粟国島では悪神のこもる洞窟に粟、花米、酒、魚を献じて創造神をおびきだし、悪霊退散させた。渡名喜島では、カミが着物を脱ぎ褌をすると国生みが行われたとしていて、contextの構造が類似している⁽¹⁵⁾。

ニュージーランドのマオリ神話における天地開闢の状況については、「大始はテ・コレ(TE KORE)つまり何も存在しない「無」の虚空であった」としている。テ・コレとは天と地には時間も空間もおおよそ形あるものが一切存在しない状況である。天地開闢を混沌とした無の状況、または虚空で表現し、原始的な混沌として説明することについて、マッセイ大学主任講師角林文雄(1996)は、古代学研究において、「太古の混沌からの国生みは日本と直接、間接に関係する東南アジア、ポリネシア、ミクロネシアにも広くみられる。(Roland Dixon, 1964. The Mythology of Races)たとえば北ボルネオの神話では世界がつくられたとき、水だけがあり、そのなかに大きな岩があった。男と女が岩の上にいた。かれらが水浴したとき、その垢が身体から流れ落ちた。男はこれが陸地になるだろうといった。そして陸地になった

(中略) 男と女がいたのであるから性の営みが推定され、ハワイ神話の島を生んだのはパパ(地母神)の存在とともに日本神話との起源を共有していると考えられる。さらに古事記、日本書紀のイザナミを追ってイザナギが黄泉の国に死者の世界を巡ね行くのはニュージーランドのマオリの父神ランギと娘ヒネの哀話に共通する」とI. H. N. Evans (1923) および Dixon (1964) を引用しながら、日本神話とポリネシア神話の類似性を指摘されている⁽¹⁶⁾。海洋民族として日本民族のなかの海人族と南太平洋のマオリ族は、共に海洋性民族であるという共通項から来ていると理解される。特に両民族共に島から島へと舟ないしカヌーで荒海を渡るとき、どこかで他の島に出会わない限り天には果てしない空と雲、海の青さが続く大洋との境では、何もない「無」の混沌が始まりと意識するのが自然である。そして風、雲、大洋、雨、嵐など気象変化が最大の関心であった以上きわめて自然な神話における類似点であると考えられる。この無限に続く虚空としてのテ・コレのなかに、マオリ神話では陰陽の人格神である男性神のランギ(RANGI)、女性神のパパ(PAPA)が誕生してくる。不思議なことにマオリ神話では人格神以前に神々の住むパラダイスである高天原のような神聖な権力構造としてのイメージは存在していない。これは古事記、日本書紀が海人族、縄文族などを平定していくなかで、奈良朝廷の権力構造の合理化として機能した歴史との差異であると考えられる。

マオリ神話、マオリ伝承については、イギリス系民話(Pakeha)研究者であるA. W. リード(Reed, 1974)の「マオリ神話とマオリの国土の伝承」(Myths and Legends of Maoriland)が知られている。この論考ではリードが収集採話したマオリ神話の伝承記述と、マオリ文化協会のアリストア・キャンベル口述、由此濱省吾訳「マオリ神話」(1996)をもとにマウイ伝承を記録した。現在マオリ系の口述者で正確に先祖伝来のマオリ神話を口述できる話者はきわめて少なく、短期間の学生指導の滞在では会う事は難しく、考証問題は残るが両本をもとにマオリ神話の骨子を文化

伝承の context の比較として紹介したい。

「マオリ神話では男性神ランギは虚空である天空に存在し、女性神パパは地上である大地を支配して共に固く結びつき離れなかった。その後のマオリ神話の中核をなす神々と人間の創造神となる。ランギとパパは抱擁して6人の男子を産んだ。この6人の息子とは、風の神であるタフィリマテア(Tafirimatea)、森の神タネ(Tane)、戦争の神ツー(Tu)、海の神タンガロア(Tangaroa)、サツマイモのことをクマラというが、サト芋、サツマイモなどすべてのお芋の神であるロンゴ(Rongo)および羊歯の根っこ神ハウミア(Haumia)であった。いずれも風、森、戦争、海などギリシャ神話にも共通する自然神のほかは、ポリネシア諸島に住む海洋民族の生活にとって欠かせない食料としての芋や根っこの神である。ところが6人の息子たちは天を支配する父であるランギ、大地を支配する母であるパパの一体化した体内に閉じ込められていたので狭く窮屈に思い、輝く光りに憧れ自由を求めて天と大地の分離を企てた。

しかし風の神タフィリマテアは、両親である父なる天、母なる大地からの分離に反対し、父のランギとともに虚空に残った。分離の企ては森の神タネが、大地の母パパから手足である樹木の枝と幹を大きく伸ばし、天の父ランギと引き裂いたことから始まる。森の神タネは樹木を使って必死の怪力により天と大地の分離に成功した。しかし現在も息子たちとの別離を悲しみ、天の父と大地の母は涙で雨や霧を降らせ、嵐を起こしているという。息子たちは独立して次々と神々を生み、地上に動物、植物を育てた。最後に人間を生もうとしたが同性の息子たちばかりだったので、異性の女性を創造しなければならなかった。森の神タネは、大地の女性神パパの身体から粘土をとり、神々に似せて女性を造形し、生命を吹き込んだ。タネはこの娘ヒネイティマナと結婚して、次々に人間たちを誕生させた」⁽¹⁷⁾

筆者がオセアニア研究の授業でこの話をしたとき、天地創造と粘土からの女性の造形は聖書、ギリシャ神話と似ていると発言した学生がいた。社会人類学者エドモンド・リーチ(Edmund Leach,

1969)は、「神話としての創世記」(Genesis as Myth and Other Essays)において、天地開闢神話のなかでポリネシア、オーストラシア神話と聖書物語の類似性を指摘しているが興味深い。リーチは「分離の原理である光に始まり、分離を起こすものとして天と地がある。分離から樹木が作られる。創世記は分離して動き回る獣をつくり、最後に正しい道を歩く人間をつくる。つまり創造された世界がひとつの基本原理になるという二元性原理をもとにしている」と聖書の構造を述べている⁽¹⁸⁾。ポリネシア系神話における二元性原理は、日本神話のイザナキ、イザナミの国生み神話にも共通し学生の指摘はこの意味ではグローバルな問題提起として評価したい。

父神ランギと娘ヒネの性交渉による国生みについては、罪を恥じてヒネが死に暗黒の闇の世界へ入ったという黄泉伝承となっている。森の神タネが樹木と土壌を加工して生命をあたえる神話は、マオリ特有の木彫にも表れている(写真2)。Fikairo Raukau(木彫)は、マオリの伝統木彫として、現在は手工芸品として知られるが、元は民族の歴史と伝承を象徴した文字を持たないマオリの言語的表象として注目される。ニュージーランドのロトルアのマオリ村落では、現在もそれぞ

れの家族の家柄、家系を Pou Tokomanawa(大黒柱)に彫刻して、家屋のなかに祭っている。ニュージーランドの博物館では、この木彫を生活芸術として展示して宗教的芸術としての異形のカミの意味作用を伝えている。

日本神話では古事記の創世記神話で、くらげのような浮き島は大地として望ましくないとして、人格神イザナキ、イザナミがアマの御柱を回り、結婚の性の儀式をやり直すストーリーがある。ここには「天つ神の命もちて、ふとまにに占えて詔りたまわく、女の先にいえるはよりてよからず。」と、イザナキが『あやにやしえをとめを』といい、イザナミが『あやにやしえをとこを』と述べて国生みをする。『ふとま』とは古代中国の吉凶を占う鹿骨の焼き具合による訓えであり、性差の強調とともに大陸中国からの影響を感じさせる。しかし多神教な男性神、女性神のおおらかな性儀式の記述は大陸的というよりも、アニミズムの色濃いポリネシア神話との共通点が多い。この後に国生みに疲れ、黄泉に下った母性神イザナミの死が記述され、死の穢れを清めるためのイザナキの禊が行われる。「イザナキの大神詔りたまわく、吾はいなしこめき穢き国に到りて在りけり。故、吾は御身の禊せむ」と筑紫の日向橘の小門で禊する。このような神聖な水による禊は、ポリネシア諸島に共通する宗教的な儀式である。南方系の影響を強く記述に残す創世記神話が日本、マオリに共通していることを指摘しておきたい。

「神話の原像」の著作のなかで民俗学者山上伊豆母(1969)は、「火と水は原始生活の生命の糧であり、山と海とは生産の重要な場であった。したがって火は山に住む雷神から得られるものと考え、水をとるアメ(雨)は、アメ・アマ(天)からアマ(海)につながっていた。当然のことであるが以上の文化を醸成していった固有の風土は、海洋中の列島であるから、各時期を通じ特に漁労民(アマ海人)の特性が著しいのは論ずるまでもない」⁽¹⁹⁾と記述し、日本神話における海人である漁労民の伝承である神話の天語り(アマカタリ)の占める位置の大きさを指摘している。特に山上は、日本神話における「神話」(カムカタリ)と



写真2 ワイトンギ条約記念館のマオリの木彫

「天語歌」(アマカタリウタ)の海洋性をあげて、「古事記」のなかの八千矛神(ヤチホコ)と沼河比売(ヌマカハヒメ)・須勢理毘売(スセリヒメ)の唱和、および雄略と三重の采女(ウネメ)との語らいの古代歌謡に注目している。筆者は黒潮に面した伊勢の三重県出身なので、特に内陸騎馬民族の特性である勇猛な性格を擬せられる雄略天皇と、彼の列島制覇を支援していく海人の伝承と、華麗なロマンであるイセのウネメとのかかわり合いには関心を持っている。

この記述で唆に富むのは山上が神語(アマカタリ)と天語歌(アマカタリウタ)の「アマ」という音韻に、「アマ」(海)と海人とかかわりを見ていることである。山上は「アマテラス大神が天照ラスになる前の原像が、海照ラスであったという見解が認められるならば、古典上に海照ラス神の例は意外に多いのである。誰も想起するのは大国主神の国作りの協力神スナヒコが常世国へ去った後孤独な大国主神の愁いときに古事記に、『是の時に、海を光らして寄りくる神あり』おなじく日本書紀には『神しき光り海に照らしてたちまちに浮かびくるものあり』とあって大国主神の幸魂、奇魂とある(後略)」⁽²⁰⁾と記述して、アマ(天)とアマ(海)の共通語源を指摘している。日本の大神であるアマテラスが姫神で女性であることと、イセ(伊勢)の太平洋側に祭られていることもポリネシア系母性神を思わせる。マオリ族神話のWAHINE TOA(強い女性神)と関連して、ウェリントン教育大のケリ・カー(Keri Kaa)と共通点を指摘した。さらに弟スサノオが最初は暴君であり、後にやさしい大国主としての出雲神話の主人公として日本海側に祭られることは大変興味深い。

山上はイセ(伊勢)の原神とされるイセツヒコの国譲り説話に、『天輝きて日(ヒル)の如く、陸(クガ)も海(ウミ)もともに朗(アキラ)か』と海の火雷(カミナリ)神の性格を共有していたとしている。雄略紀のアマ語り歌は、神語り歌であり、歌詞に「三重の子が指挙げせるみず玉浮き(中略)豊御酒献げらせ」と饗宴との関わりを示している。水との関わりでは禊(ミソギ)による

国作り説話は、東南アジア諸国の民話に共通した主題であり、現在も祭りの前や祈祷の前に海や河川で身を清める習慣が南方系民族に多い。ニュージーランドのマオリ族も海洋性民族として禊(ミソギ)の習慣がある。記紀の海幸彦と山幸彦の伝承が九州における隼人(ハヤト)説話やハヤトの歌舞に古代から歴史を越えて記紀の海人伝承の残した影響をみることができる。海人(アマ)語りの伝承が黒潮の潮流に従った環太平洋文化への広がりを意識させるのである。古代史における「神語り(カムカタリ)」と「天語歌(アマカタリウタ)」については、碩学折口信夫が伊勢の海人系伝承との関わりを主張され、国文学者土橋寛(1952)は「宮廷寿歌とその社会的背景―天語歌を中心として」で海部または天語連と歌謡の関わりを指摘している。「八千代の 神の命は八島国妻枕きかねて 遠遠し」と天語歌は宮廷にあがった采女たちの寿き歌であると同時に、果てしない海のかなたにひろがる海人たちの望郷のうたでもあった。

4. 日本神話の山幸彦海幸彦伝承とマウイの大魚伝説の関連性

マッセイ大学の角林文雄は、1893年のミュラー(F. W. K. Muller)の比較神話の研究以来海幸彦山幸彦の神話起源が東南アジアにあることは確定したと述べている。角林は東南アジア起源のこの神話が、ポリネシア民族の神話と伝播した経路について、スマトラ、インドネシア、パラウ、セレベス、そしてポリネシア諸島経由でひとつはニュージーランドのマオリ、もうひとつがハワイ諸島へと伝播したとしている。そして山幸彦である「ヒコ・ホホデミ」が海神から教えられた魔法の釣りバリと玉で大津波を起こした記紀の記述は、神武と思われる種族の東征を意味しているとしている⁽²¹⁾。ここでは神話としての神武については詮索せず、兄海幸彦が貸した釣りバリを弟山幸彦がさがしに海上に行き、兄に弟が勝つというcontextだけに注目して比較検討してみたい。

日本古代の記紀神話では「海彦山彦」の兄神隼

人の祖といわれるホデリノミコト（海幸彦、ホノ・スソリ）とするから釣りバリを借り、釣りをした弟神天津日子ホオリノミコト（山幸彦、ヒコ・ホホデミ）がハリを大きな魚にとられた。兄神に叱責されて海底に潜り探しにいった。山幸彦が竜宮を訪問し、海神の姫（トヨタマヒメ）の愛情を受けるストーリーは、古事記の日本神話の白眉であり、同様の物語が丹後風土記にもある。このストーリーは戦前戦後の教科書に記述され、有名な明治浪漫派の天才画家青木繁の描く「わだつみのいるこの宮」の名画でも知られている。この海洋民族的神話は3段構成をとっている。

第1段 ホオリノミコが、ホデリノミコから釣りバリを借りる。

第2段 ホオリノミコが竜宮で、トヨタマヒメに会う。

第3段 ホオリノミコは竜宮でもらった呪術で兄神を屈服させる。

兄神と弟神の争いと海の巨大魚という主題のストーリーがマオリ族のマウイ伝承にある。そのひとつが「マウイの大魚」である。海洋民族としての日本神話とマオリ族神話にみられる類似の原点はアマ（海人）の航海者による島嶼部への伝播と海流の流れによる民族移動の流れに求められると考えられる。山上はさらにイセツヒコをサルタヒコとみて石窟の雷神であり、「漁りしてヒラブ貝に手をくいあわさえて、海塩の沈み溺れ」と記紀神話をひいているが、関わりの真偽はわからない。ただ「天語歌」を「海語歌」とすると、折り返し句に「ことのかたりごと」（コトノカタリゴト）と繰り返しリフレインするのは、「琴」による伴奏とする説もあるが、マオリ語での挨拶として、マラエなどの祝祭の場で自己紹介するとき、「テナコト、テナコト」で始めるコトの音韻に通じるものがあるのは興味深い。マオリ族の神話として海洋性民族の context として、よく知られている「マウイの大魚」を紹介し、日本神話の「山幸彦海幸彦」の類似点と相違点を比較してみたい。マウイは弟神で山幸彦と同様の設定であるが、兄

弟神に、日本のような海幸彦、山幸彦のような地域による住まい（漁労民、農業民）による差異はつけられていない。弟神マウイが意地悪な兄神たちにいじめられるが、最後は兄神に大漁をもたらした勝つストーリーは、きわめて日本神話と類似している。マウイは祖母の顎骨で独自の釣りバリをつくり、大魚をしとめる。この大魚が北島であり、国生み神話の形式をとっている。この「マウイの大魚」では、マウイは大きな北島を釣り上げるが、海底に竜宮城があるというような夢物語のような海底の記述は無い。全体に日本のような浪漫性はなく、漁師としての日常的な現実生活感が強調され、神というより人間の兄弟の葛藤としての劇的展開がマオリ神話では行われている。

第1段 兄神たちが、海に漁に行くとき、いつも弟神は置き去りにされている。そこで兄たちの舟の底にかくれて、兄たちと海に出た。

第2段 兄神たちは海で漁をしたが、不漁続きであったので、弟神は釣りをさせてくれと頼む。兄たちは釣りバリを貸さず、マウイは自分で祖母の顎骨で作ったハリで釣りをする。

第3段 弟神は骨の魔力によって、巨大な魚を釣り上げた。これが現在の北島である。

では A. W. Reed と、由比濱省吾のマオリ伝説採話に従い、この「マウイの大魚」のストーリーを紹介したい。

マウイの大魚

「ある朝暗いうちにマウイを置いて兄たちは黙って海岸に急いだ。しかしマウイは、兄たちの声に目覚め、後をつけた。兄たちは漁の得意なマウイをねたみ、兄たちだけで海に漁に出ようとした。マウイは兄のカヌーの船底にかくれて、カヌーが海に出てからいっしょに漁をさせてくれるように頼んだ。兄たちはマウイをしぶしぶ漁に参加させたが、釣りバリや竿をあたえず船をこぐ手伝いしか許さなかった。マウイは

山の形を見て良い漁場を兄たちに教えたので大漁で魚がいっぱいとれた。兄たちは帰りがたがったが、マウイは「私も釣りをしたい」と願った。しかし兄たちは釣具を貸さず「釣りバリも無いのに釣れるはずがない」と拒否した。マウイは隠し持っていたバウアの貝殻と犬の毛の房で作ったハリを取り出した。ハリのもどしには死んだ祖母が残した顎骨のかけらがついて魔力をあたえていた。兄たちは「確かに良い釣りバリだが、餌無しでは釣れまい。お前にやる餌はない」といった。マウイが餌をねだると兄たちはマウイをなぐった。マウイは鼻血を出した。マウイは自分の血をハリにつけて水のなかに投げ込んだ。ハリには巨大な魚がかかった。巨大な魚をマウイが釣り上げようとすると海の波は荒れ、カヌーは沈みそうになった。兄たちは泣き叫び、ひれ伏した。マウイは神に呪文を唱え、海は静かになった。マウイはニュージーランドの北島を釣り上げた。北島は今も「テ・イカ・ア・マウイ」（マウイの大きい魚）といわれている。」⁽²²⁾

「マウイの大魚」のマオリ語でワカ（WAKA）といわれるカヌーと大魚のイメージを、リーズ本のデニス・ターナー（D. Turner）の挿絵（図5）で紹介したい。

このマウイの大きな魚の神話伝承は、このストーリーのほか収集者、採録者によって多様なバリエーションがある。大筋は以上のような兄神たちである横暴な海洋漁労神と、マオリ族の先祖神である正直な弟神マウイが、釣りバリをめぐって争い、最後に弟神が勝利して北島を釣るというストーリーは日本神話と多くの類似点を持つ。これは海洋民族の漁労にかかわる航海と国土創設の物語であり、日本神話にある「海幸彦山幸彦」神話の釣りバリと兄弟の争いと context が類似していて興味深い。特に兄神が意地悪で弟神が我慢して最後に勝つという点は類似している。相違点としては山幸彦が兄の釣りバリを失うストーリーではなく、兄神達が意地悪で釣りバリを貸してくれず、船にも乗せない。そこで自分で死んだ祖母の顎骨を使ってハリを作っていたという部分である。マウイを可愛がっていた祖母が、マウイに「死んだら顎骨

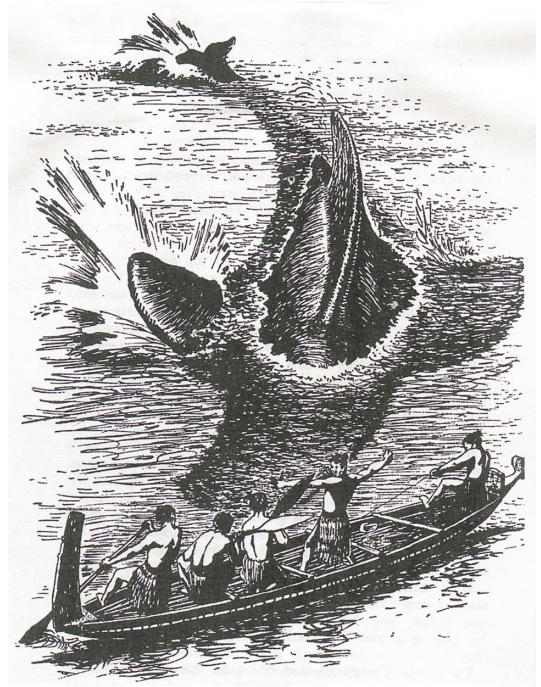


図5 A. W. Reed “Myth and Legends of Maoriland” の D. Turner の挿絵

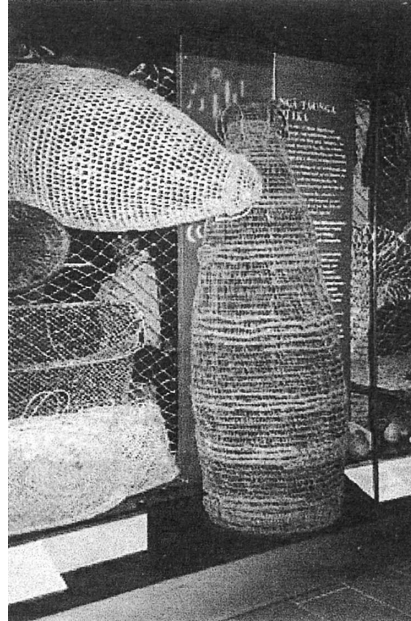
でお守りをつくりなさい」という筋書きはこのほかにも多くマオリ神話に残されている。愛着を持った親族の魂のこもる顎骨を使って、生活の道具をつくり、死者の魂と魔力を受け継ぐというストーリーはマオリ神話に多い。

循環性コミュニケーション・モデルにあてはめると神話として物語は記号化され、政治権力の象徴化したのは、この島に漂着したマオリ族の首長の権威づけとして機能し、神話の上では弟神の北島の支配体制を合法化する。邪悪な兄神たちは南島に先着したマオリ族の他の首長たちを象徴している。賢い弟神の漁労技術に敗れ、比喩されている context と思われる。釣りバリは漁労民の最も大切な生活必需品であり、マオリ文化の常設展示をしている博物館でも鹿、クジラの骨によるハリ、鋭い石器による緑色の貴石を加工したものなど貴重な宝石なみの扱いを受けていたことが理解される。このように情報である神話を交換するなかで、記号化、記号解釈、記号化が循環的に再生産されていく過程が、マオリ族の神話統合による

ニュージーランドの先住民族としての宗教的祝祭文化や生活のための民族的生活用品などの知恵・工夫を展示する。



マラエ（祝祭場）の木彫芸術



海や河での漁労道具

写真3 マオリの祝祭場マラエと漁具展示（オークランド市立博物館）

複合文化の政治コミュニケーション過程である。これが部族ごとの地方語を、ひとつのマオリ語へと民族統合により標準化していく一般化過程のコミュニケーション・モデルであったことが理解できる。

太平洋の大魚といえば、マオリ神話では過去も現在もクジラをイメージすることが多い。クジラは生態学的に哺乳類であり、厳密に言えば現在は魚類ではない。しかし古代神話の時代では大魚に近いイメージであった。特にマオリの神話で大魚といえば、クジラが出てくるものが多いので、そのなかで典型的な「テイニラウと可愛がっていたクジラ」の伝承説話を紹介したい。テイニラウは、マオリの大酋長の名前である。クジラはマオリ族の神話では、沖合いで家族で戯れ、呼吸のために潮を吹き上げる信仰の対象であり、種族のペットのように意識されていて、鯛、鯖、鰹、平目などの魚を釣るように食料として常に漁業の対象になっていない。ニュージーランド映画の「鯨に乗る少女」“The Whale Rider”のように、マオリ族に

とってクジラは海に住む先祖神として宗教的な意味を持つ生き物であった。マオリ族が飢饉となり、飢えに苦しんだ時には、神に祈りをささげて捕獲して食料とした。また皮を剥いて、住居の天幕としたり、その骨は貴重な釣りバリの原料や首飾りなどの細工原料とされ、大量の美味な鯨肉を提供しマオリ族の飢餓を救ったというストーリーは多い。ただマオリ族ではクジラは擬人化されて、愛すべき神聖な動物となり、祭礼および飢餓以外には食用にしていない伝統がある。

テイニラウとクジラ

テイニラウは、マオリの酋長で美しく高貴な風貌で尊敬されていた。さらにクジラの調教でも知られ、クジラたちは彼を友人として遇した。彼はクジラたちのなかで最も大きいトゥトゥヌイの背中に乗り、海の中をかけまわるのが好きであった。彼の息子が成人式をするために、高位の僧侶カエを招待して盛大な宴会をした。ご馳走がなくなり、カエが帰ろうとしたとき、テ

イニラウは「まだご馳走はある。トゥトゥヌイすぐ出ておいで」とクジラを呼んだ。「お前の肩肉を少しくれ」と少し切りとって、ふるまった。僧侶カエは、これほど美味しいものはないと驚き、クジラをだまして連れて帰り、食べてしまおうと悪だくみした。「わしの村は海の彼方なので、お前のクジラであるトゥトゥヌイの背中に乗せて欲しい」と頼んだ。酋長は最初断ったが、僧侶の機嫌を損じてはと貸すことにした。「カエよ。クジラは大きく浅瀬に弱いから、村に近づいたらクジラから下りなさい。そうしないと村にクジラは直進して座礁するから注意なさい」と教えた。しかしカエはクジラを食べるのが目的だったから、酋長の忠告を聞かず、クジラを座礁させて殺して、村人たちとクジラを全部肉料理にして大宴会をした。

北風が海の反対側に住む酋長ティニラウのところに、僧侶たちが食べたクジラ料理の臭いを運んだ。酋長は怒って妹たちに、カエなど僧侶たちを探し出し復讐をするよう命じた。妹たちは踊りの名手で、全国を旅してカエらクジラを食べた僧侶を見つけることにした。妹は「カエら僧侶は、服装を変え隠れています。どこに特徴がありますか」と聞いた。酋長は「カエの歯はねじ曲がっている。それを隠すため彼は口を開かない。笑わせて口を開かせ、曲がった歯を確かめるのだ」といった。妹たちはカエの村に行き、踊りを見せてひとびとを笑わせ、歯の曲がりを調べようとした。カエの村の集会場では、妹たちの踊りを見ようと沢山のひとが集まった。そのなかに顎まで外套をくるまった怪しい男がいた。妹たちは集会場のひとたちを笑わせる為、性を見せつける滑稽な踊りをしてカエを笑わせようとした。滑稽な性的な踊りに怪しい男は大口を開き、曲がった歯を剥き出しにして笑った。妹たちは男の曲がった歯を確認して、おびきだして兄の酋長に突き出した。兄はカエを捕らえて、斧をかまえて言った。「お前がクジラのトゥトゥヌイを殺したときに、クジラはどんな泣き声をあげたか」酋長の斧は悪だくみをした僧侶カエの首を落とし、復讐は終わった⁽²³⁾。

このストーリーに出てくるような擬人化されたクジラが、日本神話に登場することはない。クジラは琉球など南西諸島の黒潮に乗って、四国の室戸岬、和歌山の潮の岬、太地海岸、房総沖などで現在も生息し、群泳しているのが観察されている。日本では古代捕鯨についての記録はあるが、神話の対象としてカミとして崇められることは少ないようである。

歴史学者石母田正は、出雲国風土記の「国引き」詞章を分析し、「童女の胸鉏（鋤）取らせて、大魚の支太（鰓）つき別けて」の記述は、大魚は沙魚（鮫）であり、古代人の漁労と農耕を象徴した伝承であるとしている。

三重県鳥羽市相差町では、古代から漁民と鯨の関係が深く毎年7月14日に相差町をあげて鯨祭りが行われている。神体は鯨で背中に黄金の十一面観音を乗せた鯨の伝承が残る岬があり、鯨岬といわれている。このいわれを大切に守護神として張物の大きな鯨を漁師たちの若者が担ぎ7月14日に町を練り歩く。そして最後は海に張物を流すことで終わる。また東北の牡鹿半島の突端で、鯨漁が盛んであった宮城県牡鹿町鮎川浜では毎年8月の第一土曜、第一日曜に鯨祭りが行われている。特に見世物としては張物の鯨を漁師が模擬舟で追う網代式捕鯨をショウとして観光用に見せている。

歴史的には日本で大魚として古事記に出てくるのは、因幡の白兔の悪役としてのワニである。鰐（ワニ）は南太平洋、オーストラリアに生息する大型爬虫類クロコダイルではなく、日本史では通常「鰐鰯（ワニザメ）」といわれ大型のシュモク鯨ないしアオザメが潮流に乗って日本海海岸に近づくことが、この古代史における大魚の象徴記号である。山幸彦を背中に乗せて、海底のトヨタマヒメに案内したのは、古事記では塩椎神とあり、人格神か動物か、海亀なのか不明である。丹後の浦島伝説では、砂浜で子どもにいじめられていた海亀を助け、亀の背中に乗り竜宮に行くときとされているが、亀はあまりマオリ神話に登場しない。日本神話の山幸彦であるホオリノミコトが、海神の娘である美しいトヨタマヒメと結婚した後、海底から地上に臨月の身で夫であるホオリノミコトを

たずねて出産する。このときトヨタマヒメは、産室で子を生まうとするとときに、すべて異郷のものは本国の異形の姿に変身するので絶対に見ないで欲しいと願う。しかしタブーを破られ覗き見したホオリノミコトは産室でのたうちまわる八尋の大鰐を見てしまったと記述されている。そのためトヨタマヒメは秘密の玉を渡して海に戻る。つまり大鰐は海洋民族としてのアマ語り（海神伝承）につきものであり、ワニザメが黒潮の暖流から分岐して、リマン海流に乗って古代から日本列島の近海に回遊していたことを示している。

丹後風土記と謡曲浦島の浦島伝説では、子どもたちにいじめられていた五色の大亀が、背中に乗せて竜宮に案内し、鯛、平目の魚類が竜宮で舞踊り歓迎するということになっている。大亀や鯛についてはポリネシア諸島では日常的に海岸村でみられる。ただ亀の神格化はあるが、マオリ神話のようにクジラを祭神として特別視している例は少ない。日本ではクジラや捕鯨を主題とした絵馬や絵額が太平洋海岸地域の神社に奉納されていることは多いが、捕鯨国なのでクジラそのものについてのイメージはマオリとは異なっている。

このマオリ伝説で興味があるのは、悪い僧侶カエを探しに旅に出た妹たちが、カエの曲がった歯を確かめるため卑猥な滑稽な踊りを集会で観客に見せつけたという点である。記述によって差異はあるが、性を見せて踊ったという記述の類似点である。

日本神話では太陽神である姉アマテラスが、弟神であるスサノオがあまりに乱暴な行為を重ねるので、天の石屋戸のこもってしまうため、毎日常世暗くなり暗黒の恐怖が続いた。そこで神々が相談して、アメノウズメノミコトに石屋戸の前で「神がかり為で、胸乳をかき出で、裳紐をほとに忍したらしき。ここに高天原動みて八百万の神ともに笑いき」と記紀では記述し性的な滑稽な笑いによる成功談がある。神々を笑わせるためストリップをするというところが、マオリ伝承にも見られて興味深い。マオリ神話ではクジラについては、多くの象徴的な伝承を残している。ウェリントンのテ・パパ国立博物館に展示されていたクジラと

樹木の伝承の記述は美しいストーリー性を持っているので紹介したい。

クジラと樹木

海に住む巨大なクジラと、大地にそびえる巨大な樹木カウリは、同じ先祖である森の神タネを父とする兄弟であった。大昔また大昔、クジラは海岸近くに泳いできて、カウリの樹木に言った。「カウリよ。お前はいつも同じところで立っていて退屈しないか。一緒に海に帰ろう。海は涼しいし、魚たちが泳ぎ、いつも新鮮な水が満ちているよ。」しかしカウリの樹木は「クジラよ、お前は海が好きだ。しかし私は大地が好きだ。大地には風が吹き、美しい花が咲き、新鮮な空気が在る」と答えた。

そこでクジラは、樹木のカウリと皮革の交換をした。その結果クジラの皮は、暗い灰色色をして、ざらざらしていて、カウリの樹皮とそっくりである。そして両方ともに皮から人間たちの欲しがるにいいのよい香油がとれるのである。

5. マオリのカヌー伝承と森の神タネによる森林資源保護の思想

マオリ神話には、海洋民族として航海の木彫りの舟カヌーにまつわるストーリーが多い。

ここではそのひとつである「ラタとカヌー」を紹介したい。WAKAといわれるカヌーはマオリ族にとって、海洋や河川を渡る交通手段という便宜的な意味だけでなく、生活のすべてであり、ときには宗教的な意味を持っている。特に大型のカヌーの先端には先祖の霊を祭る木彫の飾り物がつけられていて、美術的な価値も大きい。良いカヌーの持ち主になることは、マオリ族のリーダーとしての酋長の条件であり、一族の誇りの神話でもある。

A. W. Reed の Myth and Legend of Mariland と、アリスティア・キャンベル口述、由比省吾訳「マオリ伝説」に従い、ストーリーを紹介する。

ラタとカヌー

「大酋長ラタは、カヌーが必要だった。その

ため大きく、逆巻く荒波に耐え、重い衝撃に強い樹木が必要だった。ラタは父親の骨があるという遠い島へ聖なる旅に出たいと願った。ラタは海洋を越える樹木を探すのに苦労した。求めるカウリの樹木は枝を広げるまでに、真っ直ぐの巨大な幹を持ち、大空にそびえていなければならない。彼はある日このような高貴な樹木に出会った。その樹木は、巨大な幹を持ち、そよ風が葉をゆすり、日光を一杯に受けていた。ラタはただちにその樹木の姿に、彼のカヌーが取るべきかたちがわかった。カヌーの全身は、樹木の中に隠れている。ラタは村に引き返し、石斧や鑿を用心深く選んだ。翌朝太陽が上らないうちに、樹木のところに行き、石斧をふるい樹木と戦った。やがて樹木はうなりをあげて倒れた。彼は枝をはらった。ラタは日暮れに満足して帰った。

その夜山の神であるタネとその子どもが、小鳥達や昆虫や森の生き物と現れた。山の神タネは、人間であるラタが、森の霊たちに敬意を表しないことに怒り、呪文を唱えた。

木切れは舞飛ぶ
根っこも舞飛ぶ
みな近くにある
みな突き刺さる
みな樹木に帰る

ラタの倒した樹木は小鳥達や森の生き物の手助けで、木切れは縫われ、根っこは埋められ、木の枝も葉も生えてきた。たちまち元の樹木に再生したのである。ラタは翌朝森に来ると倒した樹木は生き返り直立している。そこでまた石斧を振るって、再び切り倒した。しかし夜になってラタが村に帰ると、山の神タネと森の生き物は、ふたび樹木を直立させた。

翌朝戻ってきたラタは当惑した。しかし思い直して石斧でもう一度樹木を切り倒し、魔法のカヌーの彫り物に熱中した。夕方ラタは仕事を終えたが、村に帰らず森に隠れて様子をうかがっていた。森の神タネの手下である森の生き物が現れ、ラタのカヌーのまわりで、木切れを縫い付け、根っこを生やし、呪文を唱えた。

捨て置け

捨て置け

ラタは無知にも樹木を切った

タネの聖なる森は戻る

ラタは怒って立ち上がり、森の生き物を捕らえ、「なぜお前たちは俺のカヌーの邪魔をするのか」と問うた。森の生き物は答えた。「森の樹木は神であるタネのものである。あなたは樹木を切り倒してよいか、タネに許しを請わないではないか」

ラタは、許しを求めなかった自分を恥ずかしく思い反省した。森の神タネと生き物は、ラタが罪を悔いているのをみて、許した。「ラタよ、村に帰れ。カヌーは私たち森の神が作ってあげる」そこでラタは村に帰り、翌朝森の樹木のところに来てみると、見事に彫刻されたカヌーが出来あがっていた。ラタは偉大な森の神タネに感謝して、お供物をささげ感謝して、神に祈った。このカヌーを海に運び、荒ぶる波を越えて航海に出た。荒波に耐える素晴らしいカヌーであった。」⁽²⁴⁾

このマオリの神話を読むと、神聖な巨大な樹木カウリ (KAURI) の森を守るマオリの守護神であるタネ (TANE) という大自然の霊性の強さについて考えさせられる。タネはマオリの宇宙創造神話では天をつかさどる父神ランギと、大地をつかさどる母神パパの間を引き裂き、大地に天の恵みである樹木、花、動植物、人間を創造していったとされている⁽²⁵⁾。ニュージーランドの博物館展示においては、現代の自然環境保護の立場から、このマオリ神話を記述して高く評価している。北島のオークランド郊外では現在も巨木カウリの森は神聖なところとして大切に保護され、カウリ植物博物館も設置されている。巨木カウリの自然繁茂する森林は現在伐採によって少なくなり、許可なくして材木にすることはできない。胴回りの広い、いかにもカヌーが彫り出せるような樹木であり、神話伝承のように鯨のような灰色のざらざらした樹皮におおわれている。

北島、南島の材木輸出、鮭、鯛などの漁業輸出



写真4 マオリ族の木彫り大型カヌー
(テ・パパ国立博物館)

の主要な相手国は、日本である。日本の商社も日本が乱伐、乱獲しているといわれないうに、リサイクルとしての森林栽培、幼魚養殖に技術指導、資本協力を惜しんではない。マオリ神話のように環境保護は、グローバルな課題となっている。

クジラは沿岸捕鯨を禁止して、現在もクジラが回遊する南島のクライストチャーチから近いカイコウラ海岸は生態保護観察地とされ、クジラは観光資源である。また巨木であるカウリの丸太から作られる美しい彫刻に囲まれた大型カヌー（写真4）は、海洋民族であるマオリ族の守り神として博物館に展示されている。

古代から現代までマオリ族にとってカヌーは、海や川を渡り戦闘用の武器として交通手段だけではない種族としてのアイデンティティを担い、神聖な意味作用を持っている。

パケハであるイギリス系白人社会がマオリ神話を自分たちのニュージーランド国家統合のアイデンティティとして自然に受け入れられるのは、イギリス人の伝統である7つの海の航海者というイメージと合体し、さらに環境保護という現代性を内臓しているからである。このことはオークランド市立博物館、ウェリントン国立博物館テ・パパ、クライストチャーチ市立博物館でも、海洋性カヌーと木彫りの彫像の美しいマラエが会場中心に飾られていることから理解できる。マオリ族だけの神話の造形というよりも、海洋への憧れを継承するニュージーランド人全体の国造り神話の新しい継承というイメージである。

この意味で太平洋のかなたの日本神話への密かな憧憬は、日本人よりもニュージーランド人により強く感じる。今後日本人は、開かれた海の文化である環太平洋地域にもっと深い関心を持つ必要がある。

〈引用文献〉

- (1) 松村武雄（1954）「日本神話の研究」第1巻，培風館。増田義郎（2004）「太平洋―開かれた海の歴史」集英社新書
- (2) 岡 正雄（1958）「日本文化の基礎構造」日本民俗学体系2
- (3) 石森秀三（1977）「太平洋における民族移動」社会と文化ゼミナール，朝日新聞社，p. 407-410
- (4) 日本ニュージーランド協会（1998）マオリの文化・芸術・言語「ニュージーランド入門」p. 179-181
- (5) 荒川秀俊著（1980）六国史に現われた漂流記事「異国漂流物語」現代教養文庫，社会思想社
- (6) 祖父江孝夫（1977）「民族性を考える」社会と文化ゼミナール，朝日新聞社，p. 84-85
- (7) 朝日新聞社週刊朝日百科（2003）日本列島人のルーツ「渡来系と土着系の弥生人」
- (8) 朝日新聞社週刊朝日百科（2003）港川人とその仲間たち「化石人骨から」
- (9) 市川 昌（1998）「現代文化とコミュニケーション」学術出版青山社
- (10) Denis McQuail and Sven Windahl, Communication Model for the Study of Mass Communication, 1981, Longman Limited, UK
- (11) ビエール・ギロー著，佐藤信夫訳「記号論―意味作用とコミュニケーション」白水社，p. 60
- (12) 神野志隆光（2004）「古事記と日本書紀」天皇神話の歴史，講談社現代新書
- (13) 穂高神社（1997）www.Dynax.co.jp/sinsen/culture/jinziya/j-hotaka.html
村上政一（2003）www.ryoutan.co.jp/re/oni/2003
- (14) 山上伊豆母（1972）「海のワザオギ」神話の原像，岩崎美術出版
- (15) 萩原千鶴（1985）「神を迎える神―降臨神話の周辺」ユリイカ特集・日本の神話，青土社，p. 144-149
山下欣一（1985）「奄美・沖永良部島の創世神話」ユリイカ特集・日本の神話，青土社，p. 136-143
- (16) 角林文雄（1996）「東南アジア文化の古代日本への影響」古代学研究 136，古代学研究会，p. 7
- (17) アリステア・キャンベル口述，由比濱省吾訳（1996）「マオリ伝説」，Viking Sevensseas NZ

LTD

- (18) エドモンド・リーチ著, 江河徹訳 (2002)「神話としての創世記」ちくま学芸文庫
- (19) 山上伊豆母 (1972)「神話の原像」岩崎美術社, p. 37-39
- (20) 山上伊豆母 (1972) 同上, p. 128-129
- (21) 角林文雄 (1996)「東南アジア神話の波及」古代学研究 136, 古代学研究会
- (22) A. W. Reed (1974) *Myth and Legends of Maoriland*, p. 17-22, A. H. & A. W. Reed LTD, Wellington, New Zealand
- (23) A. W. Reed (1974) *ibid.*, p. 37-42
- (24) A. W. Reed (1974) *ibid.*, p. 43-47
- (25) Robyn Kahukiwa, Patvicia Grace (1987) *WAHINE TOA (Women of Maori Myth)*, Viking Pacific, New Zealand

参考文献

- Alan Armstrong (1973) "Maori Customs and Crafts", Viking Sevenses LTD, Paraparamu, New Zealand
- Witi Ihimaera (1987) "The Whale Rider", Reed Publishing LTD, Auckland, New Zealand
- W. J. Phillips (1955) "Maori Carving Illustrated" Cooperated by John Te Kaure Taiapa, Reed Publishing Ltd., New Zealand
- Paul Ryce (1993) "TVNZ Pacific Seervice, A New Opportunity for Broadcast", *Pacific Islands Communication Journal*, Vol. 16, New Zealand
- Fumio Kakubayasi (1998) "Hayato; An Austronesian speaking tribe in Japan", 京都産業大学日本文化研究所紀要第3号
- A. W. Reed (1974) "Myth and Legends of Maoriland", A. H and A. W. Reed Ltd., Wellington,

New Zealand

- John Hartley (2002) "Communication, Culture and Media Studies", Routledge, London, Great Britain
- 綾部恒雄編 (1984)「文化人類学 15 の理論」, 小泉潤二・解釈人類学, 中央公論社
- 石母田正 (1973)「古代神話成立の一過程—出雲風土記所収国引きの詞章の分析—」古代国家論第2部—神話と文学—, 岩波書店
- 石母田正 (2000) 古代貴族の英雄時代—古事記の一考察, 「神話と文学」岩波現代文庫, 岩波書店
- 市川 昌 (2002)「フィールド・ワークとしてのメディア環境—開発途上地域における教育放送援助と文化研究—」, 江戸川大学紀要「情報と社会」第12号
- 上田正昭, 井出至著 (1978)「古事記」角川古典鑑賞講座, 角川書店
- 折口信夫 (1955)「風土記の古代生活」折口信夫全集第8巻, 中央公論社
- 河合隼雄 (1995)「日本人のアイデンティティ—心理療法の着想—」, 講談社
- エミール・デュルケム著, 宮島喬訳 (1990)「社会学的方法の基準」, 岩波書店
- マックス・ウェーバー著, 林道義訳 (1968)「理解社会学のカテゴリー」, 岩波書店
- 高谷好一 (1992)「外文明と内世界」, 矢野暢 編集「東南アジア入門」第10章, 弘文堂
- 竹村和子 (2002)「愛について—アイデンティティと欲望の政治学—」岩波書店
- 土橋 寛 (1956)「宮廷寿歌とその社会的背景」文学 1956, 6月号, 岩波書店
- 萩原浅男 (1980)「筑紫神話圏—古事記の旅—」, NHK ブックス 348, 日本放送出版協会
- 安本美典著 (2003)「倭人語の解説」推理・古代日本語の謎, 勉強出版株式会社